

# ダンテと三段論法

---

星 野 倫

## 1. はじめに

ダンテ Dante Alighieri (1265-1321) は、哲学的著作として重要なものを2点残している<sup>1)</sup>。1つは、フィレンツェ追放後の比較的早い時期、1304-7年頃に俗語で執筆した未完の著作 *Convivio* (『饗宴』, 略号 *Conv.*——全15篇を予定したが第4篇で中断——) であり、この作品は、哲学者たちの饗宴のテーブルの足元で彼らがこぼした食べ物を拾い集めたもの(自作の哲学的カンツォーネ)にパン(自身による注釈)を添えて公衆に供する、と著者自ら述べているとおり (*Conv.*, 1. 1. 10-11), 諸家の説を寄せ集めた百科全書風の啓蒙的著作である。そして、もう1つが、政治思想書とも言うべきラテン語の *Monarchia* (『帝政論』全3巻, 略号 *Mon.*) で、こちらは『饗宴』に遅れて書かれ、ダンテの死の直後から広く流布したことは間違いのないものの、正確な成立年代は不明であり、この点について激しい論争が続いている<sup>2)</sup>。『饗宴』の場合と違って『帝政論』でのダンテは、懸命に三段論法を運用しながら、自ら哲学しようと試みている。しかし、「ダンテにおける三段論法」について考察した研究者はほとんどいない<sup>3)</sup>。加えて、その僅かな研究者の一

---

1) 以下にあげた2点の他に、自然学的小論として、1320年1月にヴェローナで口頭発表された *Quaestio de aqua et terra* (『水陸論』) が現存する。

2) 星野倫「ダンテ『帝政論』研究序説——成立年代決定問題をめぐって」、『早稲田大学イタリア研究所研究紀要』第5号、2016年3月、57-85頁参照。

3) 「ダンテと三段論法」に言及している文献として、次のものがある。C. Vasoli, “Sillologismo”, voce dell’ *Enciclopedia Dantesca*, Roma, 1970-8; R. Kay, “The *mentalité* of Dante’s *Monarchia*”, *Res Publica Litterarum* IX, 1986, pp. 183-91; *ibid.*, “The intended readers of Dante’s *Monarchia*”, *Dante studies* CX, 1992, pp. 37-44; *ibid.* (ed.), *Dante’s*

人である Richard Kay によると、『帝政論』における三段論法は戦略的な見せびらかしのために導入された一種のレトリックであり、これはダンテの想定した読者層が、学芸学部で少しは論理学を学んだものの職業的な哲学者・神学者にはならなかった一般知識人だったためであるという<sup>4)</sup>。だが、この主張は果たして正しいのだろうか？

本稿では、以下のテーマを扱う。

(1) 『饗宴』および『帝政論』における、ダンテの「三段論法」の捉え方の落差を検証する。『饗宴』でただ1度だけ「三段論法」の語が現れる *Conv.*, 4. 9. 6 の一節と、『帝政論』におけるダンテの「三段論法」理解をもっとも明確に示していると思われる *Mon.*, 2. 5. 23-24 とを比較対照しながら、『饗宴』と『帝政論』との間でダンテの「三段論法」理解には大きな変化があったとする解釈を提示する。

(2) 『帝政論』で最初に明確な三段論法が用いられる *Mon.*, 1. 11. 9 において、ダンテの運用を具体的に分析し、それが本当に Kay の言うような単なる見せかけ、あるいはレトリックといった性格のものであるのか、それとも立派な哲学的論証とみなすべきものであるのかを検証する。

(3) 三段論法以外に、『帝政論』でのダンテが導入・駆使した論理的技術を明らかにする。『神曲』〈天国篇〉・『帝政論』第3巻・『水陸論』の3者に共通する、論駁 *disputatio* というスタイルを取り上げ、これら3作品を執筆する前に、アリストテレス『ソフィスト的論駁について』ないし、ペトルス・ヒスパヌス『論理学綱要』第7章「誤謬について」をダンテが集中的に摂取した可能性を示す。

(4) 以上を総合して、ダンテが本格的な論理学上の知識を獲得した時期を推定する。彼が『饗宴』執筆放棄後のいずれかの時期（おそらく〈天国篇〉執筆開始直前時点）に、本格的な論理学上の知識を獲得したこと、『神曲』〈天国篇〉・『帝政論』・『水陸論』はその知識を踏まえて、近接した時期に執筆された可能性の高いことを示す。

---

Monarchia, Toronto, 1998.

4) R. Kay, "The intended readers...", p. 39.

## 2. 『饗宴』および『帝政論』におけるダンテの「三段論法」理解

『饗宴』においてダンテがただ一度だけ「三段論法 *silogismo* [sic.]」という語を用いるのは、人間に与えられた自由意志には適用の限界があって、いくら意志したとしても自然法則や論理法則を覆すことは出来ないとして、たとえ意志したとしても絶対に不可能なことを3つ例示する部分においてである。

そして、これらの働きはみな、それを思うということは確かに我々の意志に服しているとはいえ、それ自体が我々の意志に従属しているわけではない。なぜなら、我々が重い物体に自然本性的に上昇してほしいと望んだからといって、三段論法が偽なる前提を用いて論証によって真理を結論づけてくれるよう望んだからといって、また傾いた家が真っすぐだったころと同様に堅固に座していてくれるよう望んだからといって、そんなことはありえないだろうからである。  
(*Conv.*, 4. 9. 6)

この一節について、19世紀末イギリスのダンテ学者 Edward Moore は、ダンテの三段論法理解に関して一抹の疑念を表明した<sup>5)</sup>。というのも、アリストテレス『分析論前書』で哲学者はわざわざ、「真なる前提から偽なる結論を推論することはできないが、偽なる前提から真なる結論を推論することはありうる。ただし、この場合には『……のゆえに』という根拠が示された上での結論ではなく、『……であること』という単なる事実としての結論にすぎない *οὐ διότι ἀλλ' ὅτι*」(Arist., *APr.* 53b8-9<sup>6)</sup>)と述べて、妥当な三段論法において前提が真である場合には結論は必然的に真となるが、前提が偽である場合については、結論は必ずしも偽とは限らず真の場合もありうること(いわゆる「まぐれあたり」のケースの存在<sup>7)</sup>)を強調しているからである。「偽なる前提から真

5) E. Moore, *Studies in Dante: First series*, Oxford, 1896, pp. 119-20.

6) 日本語訳は、アリストテレス『分析論前書』(『アリストテレス全集』第2巻所収。今井知正・河谷淳訳、岩波書店、2014年、210頁)による。

7) たとえば、「『全てのリスは動物である』かつ『全ての人間はリスである』→『全ての

が結論づけられることは不可能」というダンテは、このようなまぐれあたりのケースを勘定にいれていないのではないかと Moore は疑ったわけである。しかし Moore は気を取り直して、ダンテは「論証によって *dimostrando*」とわざわざ付け足している、つまり演繹というしかたで偽なる前提から真なる結論が必然的に導出されることはない（あくまでまぐれあたりだ）と言いたいのだと解釈し、これはアリストテレスの「『……のゆえに』という根拠が示された上での結論ではなく *ού διότι*」に対応する表現であると考えて納得したのだった<sup>8)</sup>。だが、彼の抱いた疑念は完全に払拭されたのだろうか？ 2つの疑問が残る。

ダンテは、ここで「絶対に不可能なこと」の例として、三段論法において「偽なる前提から真なる結論を導くこと」をあげている。だが、形式的に妥当な三段論法において本当に絶対不可能なことは、「真なる前提から偽なる結論を導くこと」であって、これ以外にはない<sup>9)</sup>。不可能の例として適切なのは後者の方なのである（実際ダンテ自身、『帝政論』第3巻第2章第3節では、「必然的な推論〔妥当な推論〕においては、偽でない前提が存在しながら、帰結が偽であることは不可能である」と述べている）。にもかかわらず、ダンテが絶対不可能なことの例として、「偽なる前提から真なる結論を導くこと」をあげたとすれば、『饗宴』でのダンテは妥当な三段論法において「前提が偽であるとき結論は必ず偽になる」と考えていたのではないかと、という疑いが根強く残る。さらに、もしダンテがアリストテレス『分析論前書』の記述（ないし同じ事柄を述べた他の言説）を知っていたならば、むしろ積極的にそのことを述べようとするのではないだろうか？ 実際、現代の論理学入門書においても、妥当な三段論法において前提が偽でも結論は偽とは限らないということは、大いに強調されている。何よりも、他ならぬダンテ自身が、

---

人間は動物である』という推論は、もっとも基本的な第1格・第1式の三段論法 (*Barbara*) の一例であり、形式的に妥当である。だが現実には、小前提「全ての人間はリスである」は偽である。しかし結論では、包含関係を乱している不適切な中名辞「リス」が消え、「全ての人間は動物である」は、まぐれあたりの真なる言明となっている。

8) この Moore の見解は、G. Fioravanti による最新の『饗宴』注釈においても今なお支持されている (Dante Alighieri, *Opere*, vol. 2, Milano, 2014, p. 619 nota)。

9) 他の「前提=真, 結論=真」, 「前提=偽, 結論=偽」, 「前提=偽, 結論=真」の3ケースは、いずれも「可能」である。

『帝政論』第2巻第5章では、その点にきちんと目配りしていることを『ニコマコス倫理学』を引いて強調しながら、次のように書くのである。

実際、哲学者は言っている。「しかし、誤った三段論法を通じてまたこれを手に入れることもある。たしかに手にいれるべきものを手に入れてはいるのだが、然るべき手段によってではなく、中名辞が間違っているのである<sup>10)</sup>」と [Arist., *EN*. 1142b22-24]。というのも、もし偽なるものから何らかのしかたで真なるものが結論づけられたとしても、これは偶然によるもので、推論の言葉によって真理がもたらされているにすぎない。実際、真理それ自体が虚偽から導出されることは決してないのである。だが、真なる記号が偽の記号であるところの記号から導出されることは間々あることである。(Mon., 2. 5. 23-24)

この引用部において最終的に読者が導かれるのは、三段論法で前提が偽の場合はたとえ結論が真でもそれはまぐれあたりであって演繹的に証明された必然的な真とは言えない、という点である。しかし、その前段として、妥当な三段論法で前提が偽であっても結論は偽とは限らない、真の場合もありうるということが、少々くどいくらいに、はっきり述べられている。『饗宴』から『帝政論』までの間にダンテの三段論法の理解は飛躍的に向上しており、『帝政論』でのダンテは深化した自らの三段論法理解を明示的に表現しようと努めている、と考えるべきではないだろうか。

### 3. 『帝政論』におけるダンテの「三段論法」運用の実際

本稿の第2のテーマである、『帝政論』のダンテが三段論法をどのように運用しているのかという点についての検証に進みたい。この著作で最初に本格的に三段論法を用いることになるダンテの議論は以下のとおりである。

---

10) 注7)で例示したようなケースである。

したがって […] 以下のように証明されよう。意志と力を最大限に有する主体の中に正義が宿る時、正義はこの世で最大となる；帝王ただ一人がこのような主体である；それゆえ、この世において正義は帝王の中にある時のみ最大となる。この予備的な「本体の三段論法的前提を証明するための」三段論法は第2格をとっているが、否定を内在させており、次のように表すことができる：全てのBはAである；ただCのみがAである；ゆえにただCのみがBである。すなわち言い換えれば：全てのBはAである；C以外の全てはAでない；ゆえにC以外の全てはBでない。(Mon., 1. 11. 8-9)

ここでは、ダンテ自身が記号化を試みている。記号化の前段（全てのBはAである；ただCのみがAである；ゆえにただCのみがBである）は、言葉で述べた命題を単に記号に移し変えただけであるが、このままでは、中世において妥当な推論形式として認められていた三段論法の19の型のいずれにもあてはまらない。「Cのみが～である」という排他的な単称命題が含まれているからである（当時認められていた妥当な三段論法においては、各命題は全称命題または特称命題でなければならない）。そこでダンテは、「否定を内在している」と彼が言う排他辞 «solus» を含む命題を、近似的に全称否定命題によって置き換える（すなわち、「……のみが～である」を「……以外の全ては～でない」によって置き換える）。この操作を通じて、第2格（中名辞が大前提・小前提のいずれにおいても述語の位置にある格）のAEE（全称肯定・全称否定・全称否定）の式、いわゆる Camestres の型（「『全てのPはMである』かつ『いかなるSもMでない』→『いかなるSもPでない』」という、Mを防波堤にしてSとPの分離を言う推論）に適合する「全てのBはAである；C以外の全てはAでない；故にC以外の全てはBでない」をダンテは得る<sup>11)</sup>。Richard Kay はここでも、

11) 『帝政論』注釈史において、この箇所の正確な理解が得られたのは比較的最近、次のレクラム文庫版注釈においてである：Dante Alighieri, *Monarchia*, Imbach R.-Flüeler C. (ed.), Stuttgart, 1989, pp. 277-8 Kommentar. しかし、Imbach-Flüeler は、後述するヒスパヌス『共義語論』については触れていない。

ことさらに論理構造を記号化してみせる<sup>12)</sup>ところに、ダンテの想定読者が職業的哲学者ではないことを読み取ろうとするが<sup>13)</sup>、ここでのダンテの口吻には、わざとらしい見せびらかしというよりはむしろ、「solus」を含む文を処理し、うまく Camestres に落とし込むことに成功した少年のような喜びが感じられないだろうか。というのも、このような処理は当時、必ずしもありふれた平易な事項であったとは考えられないからである。

より詳しく検討しよう。

ここでの最終形 Camestres は、ダンテの時代の論理学の標準的教科書、たとえばペトルス・ヒスパヌス Petrus Hispanus の *Summulae Logicales* (『論理学綱要』) 第4章「三段論法」の項に載せられている<sup>14)</sup>、いわば中世論理学の初級事項である。だが、そこにたどりつく前の「solus」の処理は、『論理学綱要』には含まれていない。同じヒスパヌスで言えば、それについて述べられている著作は、ダンテの時代の写本ではしばしば『論理学綱要』と一緒に筆写されていた<sup>15)</sup>、そしてそのこともあってヒスパヌスの真作と広く認められている *Syncategoremata* (『共義語論』) のほうである。

共義語 syncategorema とは、名詞や形容詞のようなそれ自体で指示対象をはっきりもつ自義語 categorema と対になる概念で、自義語と「共に」使用されてはじめて意味をもちうる語を指す。例えば、否定詞(～ない)、排他詞(～のみ)、推断詞(もし～ならば)、選言詞(あるいは)、連言詞(かつ)のような語である。ヒスパヌスの共義語研究は、これらの日常言語レベルの共義語を一定の注解をほどこして論理演算

12) このような記号的処理は『帝政論』中に少なくとも4回出てくる (*Mon.*, 1. 11. 9; 1. 14. 1-3; 3. 5. 3; 3. 13. 4)。この箇所はその最初である。

13) *Ibid.* (ed.), *Dante's Monarchia*, p. 56 note.

14) 「[第2格] 第2式は、全称肯定と全称否定からなり、全称否定が結論づけられる。例えば、『全ての人間は動物である』; 『いかなる石も動物ではない』; ゆえに『いかなる石も人間ではない』」(*Sum.*, 4. 8)。

15) De Rijk によるヒスパヌス『共義語論』校訂版(本稿末尾文献表参照)が用いている13世紀末~14世紀初頭(ダンテと同時代)の7写本は全て、『論理学綱要』の後に『共義語論』が続く形で両著作を含み、うち4写本がイタリアのものである。このような写本伝承の状況を考えれば、ダンテが『論理学綱要』とあわせて『共義語論』に触れていた可能性は十分考えられる。

子へ洗練させてゆこうとする試みだと言えるだろう。今我々が問題にしている排他詞 «solus» について、『共義語論』では次のように述べられている。

排他詞 *dictio exclusiva* は何を意味するかという問いに対して、次のように言われねばならない。すなわち、それは「他のものについてはそうではない *non cum alio*」という言明と同じであって、つまり、全体の部分に対するつながりの欠如を意味するのである。例えば、「ソクラテスのみが走る *solus Sortes currit*」とは、「ソクラテスは走り、かつ、他の何ものも走らない」または「ソクラテスは走り、かつ、他のいかなる人も走らない」ということである。  
(*Syncat.*, 3. 6)

ヒスパヌスが言うのは、「XのみがYである」という命題は、「XはYであり」かつ「X以外の全てはYでない」という連言と同値である、ということである。ダンテは（直接ヒスパヌス『共義語論』を参照したかどうかは別にして）、何らかの形でこの変換法を知った上で、実際にこの原理を用いている。すなわち、当初の小前提「ただCのみがAである」を、「CはAであり、かつ、C以外の全てはAでない」に分解し、この後半の「C以外の全てはAでない」を、大前提「全てのBはAである」と組み合わせて *Camestres* の形をつくり、「C以外の全てはBでない」という結論を得ているわけである。厳密に言えば、この操作においては連言「CはAであり、かつ、C以外の全てはAでない」の後半部しか用いられていない。本来であれば別途、連言前半部の「CはAである」がここでは「CはBである」を含意することを示した上で（実質的には *praeter C* の補集合 C は A も B も含みその要素は1つしかないので集合 ABC がいずれも空集合でないとすると  $A \equiv B \equiv C$  となることは直観的に見てとれるが、ダンテはそのことを明示していない）、「CはBである」と *Camestres* の結論「C以外の全てはBでない」との連言から「ただCのみがBである」を再構成する手続きが必要であるが、ダンテはそれを省略している。だから、記号化した前段と後段をダンテは「すなわち言い換えれば *quod est*」とつないで



はいるが、これはあくまで近似的な処理であって同値変換ではない。とはいえ、ダンテがしようとしていることは、当時の最新の論理学の知見にもとづいて共義語を用いた命題を分析し、それを妥当な三段論法の19の型の一つである Camestres に近似的に適合させるという2段がまえの操作であり、これは当時の論理学の初級レベルを超えた中級水準の作業といえるだろう。

したがって、この事実から推測されるのは、『饗宴』以後のダンテが、いずれかの時点で本格的な論理学の知識を獲得したであろうということ、そしてその際、ペトルス・ヒスパヌスの当時流通していた12巻の初級テキスト『論理学綱要』のみならず中級テキスト『共義語論』の内容の一端に、直接・間接を問わず何らかの形で触れていた可能性がある、ということである<sup>16)</sup>。

いずれにせよ、ダンテがペトルス・ヒスパヌスの『論理学綱要』12巻を知っていたこと、彼に敬意を払っていたことは間違いない。〈天国篇〉第12歌では、登場人物ボナヴェントゥーラが紹介する学者たちの輪の中にペトルス・ヒスパヌスの姿が見出される。そこでフランチェスコ会の神学者は、かの論理学者を、*«Pietro Spano, / lo qual giù luce in dodici libelli»* (ピエトロ・スパーノ、彼は地上で12巻の書物の内に今も輝いている *Par.*, 12. 134-5) と讃えているのである。

#### 4. アリストテレス『ソフィスト的論駁について』をめぐって

ダンテの哲学的2著作における三段論法の扱いに注目しつつ、我々は、『饗宴』と『帝政論』の間のどこかの時点でダンテの本格的な論理学の摂取が行なわれたと想定されること、またその結果としてダンテが獲得した論理学的知識の水準は相当高度なものであることを見た。

16) 我々の想定するダンテによるペトルス・ヒスパヌスの摂取は、もちろん、その要点を誰かに教授された、あるいは祖述や抜粋を読んだという形で行われた可能性もある。しかし、『論理学綱要』がダンテの時代に広く用いられた学芸学部の教科書であること、次に述べる『神曲』〈天国篇〉でのヒスパヌスの扱い、三段論法以外にも『論理学綱要』を経由したと思われる事項をダンテが用いていること(次節で詳述)を考えれば、直接の参照が行われた可能性が高い。そしてもしダンテが『論理学綱要』を直接参照していたとすれば、注15)に述べた写本伝承の状況から、『論理学綱要』に続く形で筆写された『共義語論』冒頭部(「排他詞」は、「否定詞 [non]」に続いて共義語の2番目に記述されている)に目を通していたとしても不自然ではない。

しかし、それが具体的にいつのことであったかの特定は、まだ不十分である。そこで、本格的な論理学摂取の時期をより細かく見定めるために、検討の対象を哲学的 2 著作以外の諸作品にまで広げつつ、三段論法以外の論理学的技術の獲得の実態の一端を検証することにしよう。

『帝政論』第 3 巻第 4 章冒頭でダンテは、これから「論駁 *disputatio*」を開始する、と宣言し、以後第 4 章から第 12 章まで次々と、教皇派の理論家たちが主張する教皇至上主義言説を提示してはそれを論破するという論駁形式で論述を進める。ダンテの諸著作のうちで、このような強力な論駁形式が用いられるのは、『帝政論』第 3 巻の他には、『神曲』〈天国篇〉第 2 歌第 49-148 行での月の斑（まだら）の原因についてのダンテの謬見にたいするベアトリーチェの論駁<sup>17)</sup>、および *Quaestio de aqua et terra* (『水陸論』1320 年 1 月成立) における、地球上のどこかの地点で海面が陸地面より高くなっていると主張する 5 つの謬論にたいする徹底的論駁だけである<sup>18)</sup>。『神曲』〈天国篇〉・『帝政論』第 3 巻・『水陸論』の 3 者の間には、論駁形式という点で強い近親性がある。

ダンテはこの *disputatio* の技術（これもまた、広義の論理学的技術の一環である）を、いつ、どこから獲得したのだろうか。『帝政論』においてこの論駁形式が最初に登場する第 3 巻第 4 章第 4 節で、いよいよ *disputatio* が始まろうとするその時、ダンテは、アリストテレスの著作 *De Sophisticis Elenchis* (『ソフィスト的論駁について』) に直接的に言及する。ダンテの全著作中、同書への直接言及はこの 1 回限りである。

17) 〈天国篇〉ではその後も、第 5 歌および第 7 歌で、第 2 歌ほど強力ではないが論駁形式があらわれる。

18) 「論駁 *disputazione*」という語自体は、『饗宴』においてすでに 2 度用いられている。1 度はベアトリーチェ死後のダンテの「哲学学習」について述べた部分 (*Conv.*, 2. 12. 7) で、「哲学する人たちの議論 *le disputazioni de li filosofanti*」に参加した、とある。哲学することの主要な方法として相手を論駁するということがあるという認識は、この段階からダンテにあったことがわかる。だが、もう一箇所 *Conv.*, 4. 11-12 で、ダンテが実際に「富裕 *ricchezza*」というものを「論駁 *disputazione*」したと標榜する部分は、実際は羅列的な例示と権威的書物の引用によって構成されており、推論を用いた論証やその他の論理学的な技術を活用していない。

彼らのこの議論，また他の議論が論駁されるためには，まず次のことが留意されるべきである。すなわち，——哲学者が『ソフィスト的論駁について』で言うように——議論の論駁とは誤謬を明らかに示すことである。そして誤謬は議論の質料〔論述内容〕と形相〔推論形式〕の両方に存しうるのであるから，間違いを犯すには二通りのしかたがある。すなわち，偽なる前提を採用してしまったか，あるいは正しく推論していないかである。(Mon., 3. 4. 4)

ここでダンテが参照しているのは，アリストテレス『ソフィスト的論駁について』の次の記述であろう。

正しい解決法とは，どのような問いから虚偽が生じたかについて，虚偽の推論を明示することであり，他方で偽なる推論は二つの仕方  
で語られるので（すなわち，虚偽の結論を推論する場合か，もしくは，本当は推論になっていないのに推論であるように見える場合である），今語られた見かけの解決法と共に，見かけの推論が問いかけられたどの論点から推論に見えているかという点を正すやり方があるだろう。その結果，言論のなかできちんと推論されているものについては，それを廃棄し，推論しているように見えるだけのものは，区別することで解決が生じる<sup>19)</sup>。(Arist., SE., 176b29-37)

『ソフィスト的論駁について』は，ソフィストらが駆使した「見せかけの推論」を用いた論駁に内在する誤謬の類型論であり，いかに相手方の誤謬を白日のもとに暴露し反駁するかを教える論争の技術書である。ダンテは，そのもっとも一般的な原則を自らの『帝政論』での *disputatio* の冒頭に掲げたわけである。

これはダンテが『ソフィスト的論駁について』を直接参照している

---

19) 日本語訳は，アリストテレス『ソフィスト的論駁について』（『アリストテレス全集』第3巻所収．納富信留訳，岩波書店，2014年，430頁）による。

ケースであるが、他に『ソフィスト的論駁について』と、ヒスパヌス『論理学綱要』第7章<sup>20)</sup>の両方に共通して見られる事項が、特に参照先を言わないまま『帝政論』中に登場するケースが、少なくとも2箇所ある。それは、『帝政論』第3巻第5章第5節の「従って、論駁は誤っていると見なされる。『原因でないものを原因であるかのように扱っている 'non causam ut causa'』からである」と述べる箇所 (cf. *SE.*, 167b21; *Sum.*, 7. 165-7), および同書第3巻第12章第3節の「彼らは『付帯性に由来する誤謬』を犯している falluntur 'secundum accidens'」という箇所 (cf. *SE.*, 166b28-32; *Sum.*, 7. 102) である。彼は『帝政論』第3巻第8章第4-11節において、中世論理学独自の論点である周延 *distributio* の概念を用いて議論を行っており、そこに用いられている「全称記号 *signum universale*」などのテクニカル・タームを含め、ヒスパヌス『論理学綱要』第12章を参照している可能性が高い。とすれば、この『ソフィスト的論駁について』と、ヒスパヌス『論理学綱要』第7章「誤謬について」に共通して見られる事項に関しても、特にアリストテレスの名をあげていない以上、ヒスパヌス『論理学綱要』を経由して知識を得ていると考えるのが自然であろう。

下の表は、Edward Moore が、明らかにダンテがアリストテレスを直接引用している箇所として指摘したもの<sup>21)</sup>を、星野が表の形に整理したものである。『ニコマコス倫理学』や『形而上学』が、ダンテの著作歴の広い範囲にわたって長い時間の中で参照されているのに対し、『ソフィスト的論駁について』の他に『カテゴリー論』・『分析論前書』を含むオルガノンからの直接引用は、『帝政論』・『水陸論』の2書に狭く限定されている。

以上より、論駁形式を特徴的に用いている『神曲』〈天国篇〉・『帝政論』第3巻・『水陸論』の3著作が、そのスタイルにおいて近親性を有するだけでなく、共通の知的基盤、すなわち『ソフィスト的論駁について』ほかのオルガノン諸著作やペトルス・ヒスパヌスの論理学書の

20) 『論理学綱要』第7章「誤謬について」は同書の他の章と比較して格段に長く、その章だけで同書全体の45%を占めるが、章全体が『ソフィスト的論駁について』の紹介にあてられ、アリストテレスと同じく13種の誤謬の類型を提示する。

21) E. Moore, *op. cit.* pp. 92-156; 334-43.

	Vita Nuova	Rime	Convivio	De Vulgari Eloquentia	Epistolae	Monarchia	Quaestio	Inferno	Purgatorio	Paradiso	SUM
Categ.						1	2				3
Anal. Pr.						1	1				2
Soph. Elenc.						1					1
Phys.			8	1	1	3	2	2			17
De Coelo			13		1		3				17
Meteor.							2				2
De Anima			9			1					10
De Sens. et Sensib.			2								2
De Juv. et Sen.			2								2
Hist. Anim.			1								1
De Part. Anim.			1								1
De Gen. Anim.							1				1
Metaph.	2		10		3	6					21
Nic. Eth.			49		2	12	3	2			68
Pol.			5		1	9				2	17
(De Causis)			8		2	1					11

表 ダンテの著作におけるアリストテレスの直接引用

摂取の上に立脚している可能性の高いことが分かる。こうした知識の摂取が、先に見た同じくヒスパヌスに依拠すると思われる三段論法理解の深化と同時期のものでそれらの成果が『神曲』〈天国篇〉(1316年～1320/21年執筆)・『帝政論』(執筆年代未詳)・『水陸論』(1320年1月ヴェローナで口頭発表)にあらわれているとすれば、ダンテの論理的知識の摂取は1316年の〈天国篇〉執筆開始にごく近い時期のことで、その成果の上にたって時期的にも近接した形で『神曲』〈天国篇〉・『帝政論』・『水陸論』の3著作が執筆されたと想定するのがもっとも合理的であるように思われる<sup>22)</sup>。

22) 本稿では、ダンテの論理的技術の深化に焦点をあてて、本格的な論理的知識の獲得という共通の基盤に立脚すると考えられる『神曲』〈天国篇〉・『帝政論』・『水陸論』について、その成立時期の近接性を主張した。このような論理的技術の拡充は、当然、ダンテの学知に関する捉え方の変化に平行する。初期の哲学的著作『饗宴』においては、権威とされるアリストテレス他の著作をあげることで事足りりとしていたダンテの論述姿勢は、〈天国篇〉・『帝政論』・『水陸論』になると、今この場で自分が論証してみせるという姿勢に変化する。ダンテ批評において時にうるさいもの、文体を破壊してしまうものと酷評されることもあった〈天国篇〉や『帝政論』でのロジックの露出は、ダンテにとってはむしろ知性認識の喜ばしさという天上の至福のしるし、地上の生の理想状態(知的共同体

## 5. まとめ

ダンテの主要な哲学的著作である『饗宴』（1304-7年）と『帝政論』（年代未詳）とを比較すると、三段論法の理解において詩人の飛躍的な進歩の跡を見ることができる。「妥当な三段論法で前提が偽であっても結論は偽とは限らない、真の場合もありうる」という点に『饗宴』のダンテは十分に自覚的であるようには思われませんが、『帝政論』ではむしろそのことを強調して述べているからである。また、『帝政論』で三段論法を運用するにあたってダンテは、ペトルス・ヒスパヌス『論理学綱要』にあるような中世論理学の初級事項（妥当な三段論法の19の格式等）を十分知悉した上で、ペトルス・ヒスパヌス『共義語論』にあるような中級レベルの操作を加味し、それらを組み合わせて自らの論理的思考を展開しているように見える。

さらに、『帝政論』のとりわけ第3巻に見られる論争的展開においては、『神曲』〈天国篇〉第2歌（執筆時期1316年以降）および『水陸論』（1320年）と共通する論駁 *disputatio* というスタイルを採用しており、その前提知識としてアリストテレス『ソフィスト的論駁について』およびヒスパヌス『論理学綱要』第7章「誤謬について」を摂取した痕跡がある。ダンテは、論理学的知識の新たな獲得から間もない時期に、その成果を踏まえて『神曲』〈天国篇〉・『帝政論』・『水陸論』を執筆したのだと推定することができよう。すなわち、その新たな知識獲得の時期は、1316年頃ということになる。

『神曲』〈天国篇〉第2歌冒頭部で、語り手ダンテは読者に向かってこう呼びかける。

O voi che siete in piccioletta barca,  
desiderosi d'ascoltar, seguiti

---

としての人類) のしるしなのである。そして、同時期のダンテの知的装備の拡充は、単に論理学という道具の獲得にとどまらず、それを用いて展開される思想内容そのものの更新・拡充をともなうものだった。一例としてダンテの知性論の時間軸上の変遷について、次の論文で示した。星野倫「ダンテにおける可能知性 *intellectus possibilis* の問題」、『イタリア学会誌』第67号、2017年10月（刊行予定）。

dietro al mio legno che cantando varca,

tornate a riveder li vostri liti:

non vi mettete in pelago, ché forse,

perdendo me, rimarreste smarriti.

(おお、小さな舟に乗り、／歌いつつゆく我が舟の後ろを／歌聞き  
たさについてきた諸君よ、／君たちの岸辺へと今のうちに帰るが  
よい。／大洋へ乗り出すな。おそらく私を見失い、／迷える人とな  
ってしまうから。 *Par.*, 2. 1-6)

俗語を用いて、誰もがそれを味わえる視覚的・聴覚的な可感的表象によって〈地獄篇〉・〈煉獄篇〉を歌い進めてきたダンテが、ここに至って読者を選別し、小さな舟という乗り物（貧弱な知的装備）しか持たぬ者たちはここままで立ち去れ、と言い渡す。ここから先は、可知的なものについて、論理・哲学・神学の言葉で歌われる世界なのである。今までどうってかわってラテン語的語法 *latinismo* が頻出し、ベアトリーチェが、トマスが、ボナヴェントゥーラが長々と論じ語る。このダンテの傲岸とも見える強い宣言の裏には、ダンテ自身がこの関を越えて行くために費やした知的修練があったのではないだろうか。

#### 一次文献

Dante Alighieri

*Conv.* *Convivio*, (ed.) C. Vasoli e D. De Robertis, in *Opere Minori*, t. I, parte II, Milano, 1988.

*Mon.* *Monarchia*, (ed.) P. Shaw (*Le Opere di Dante Alighieri*, Edizione Nazionale, (ed.) La Società Dantesca Italiana, vol.V), Firenze, 2009.

*Par.* *La Commedia secondo L'antica vulgata: 4 Paradiso*, (ed.) G. Petrochi (*Le Opere di Dante Alighieri*, Edizione Nazionale, vol.VII, t. 4), Milano, 1967.

Petrus Hispanus

*Sum.* Brian P. Copenhaver (ed.), *Peter of Spain: Summaries of Logic*, Oxford, 2014.

*Synecat.* Peter of Spain, *Synkategoreumata*, (ed.) L. M. De Rijk, Leiden, 1992.